

宇宙背景ニュートリノ崩壊探索 COBAND 実験

金 信弘, 武内勇司, 飯田崇史, 武政健一, 浅野千沙, 若狭玲那, 笠島誠嘉, 前川群, 中原瑛衣子, 山根綾太, 守屋佑希久, 柏木隆城, 和田武彦¹, 長勢晃一¹, 松浦周二², 吉田拓生³, 浅胡武志³, 竹下勉³, 古屋岳³, 若林凛³, 美馬 寛⁴, 木内健司⁵, 加藤幸弘⁶, 新井康夫⁷, 倉知郁生⁷, 羽澄昌史⁷, 大久保雅隆⁸, 浮辺雅宏⁸, 志岐成友⁸, 藤井剛⁸, 石野宏和⁹, 樹林敦子⁹, 川人祥二¹⁰, Erik Ramberg¹¹, Paul Rubinov¹¹, Dmitri Sergatskov¹¹, Soo-Bong Kim¹², Yong-Hamb Kim¹³, Hyejin Lee¹³

筑波大学, ¹JAXA/ISAS, ²関西学院大学, ³福井大学, ⁴理化学研究所, ⁵東京大学, ⁶近畿大学, ⁷KEK, ⁸産総研, ⁹岡山大学, ¹⁰静岡大学, ¹¹Fermilab, ¹²Sungkyunkwan University, ¹³Institute of Basic Science CUP

(COBAND Collaboration)

(1) 実験の背景および実験の科学的重要性・学術的意義

本提案の研究課題「宇宙背景ニュートリノ崩壊探索 COBAND ロケット実験」は宇宙極初期に生成された宇宙背景ニュートリノの発見とニュートリノ質量測定を目指すものであり、その緊急性・重要性について学界全体から高く評価されており、2020 年 1 月に日本学術会議のマスタープラン 2020 の 146 大型研究計画の一つに選ばれている。本 COBAND 実験(Cosmic Background Neutrino Decay)では、宇宙背景ニュートリノの崩壊探索を行うために、ニュートリノ崩壊時に発生する遠赤外線のエネルギーを一光子ごとに 2%以下の精度で測定する。2024-25 年に遠赤外線観測装置を搭載したロケット観測実験を行う。現在のニュートリノ寿命の下限測定値は 3×10^{12} 年であるが、この実験の寿命感度は 2×10^{14} 年であり、これまでの約 100 倍の感度で宇宙背景ニュートリノの崩壊を探索する。

2015 年度のノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章氏の受賞研究「大気ニュートリノ振動の発見」をはじめとする多くのニュートリノ振動の観測によって、現在ニュートリノの質量が 0 でないことが示され、3 種類のニュートリノの質量の 2 乗差とニュートリノ混合角は高精度で測定されている[1]。しかしニュートリノ質量そのものは未だ測定されていない。図 1 に示すように、ニュートリノ以外の素粒子の質量はすべて測定されているが、素粒子の質量には世代間で大きな差がある。この素粒子の質量構造の起源は明らかになっていないが、それを解明するためには、ニュートリノ質量の決定は非常に重要な鍵となる。

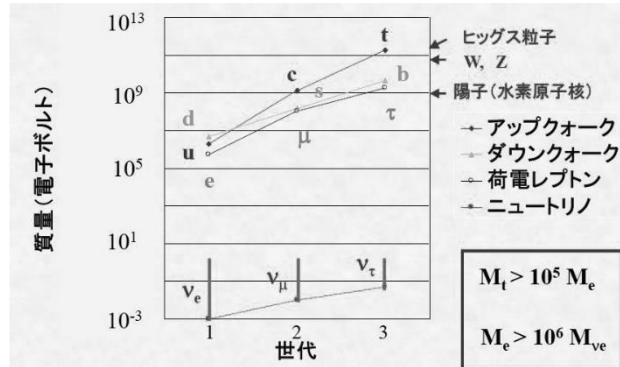


図 1. 3 世代の素粒子の質量。6 種類のクォークの仲間でも質量最小のアップクォークと最大のトップクォークで 5 桁の差があり、同じ第 1 世代レプトンでも電子と電子ニュートリノで 6 桁以上の差がある。

ニュートリノ物理学の大きな課題は、レプトンにおける粒子・反粒子対称性の破れの検出とニュートリノの質量自体の測定である。本研究の宇宙背景ニュートリノ崩壊探索 COBAND(COsmic BAckground Neutrino Decay)実験が成功すれば、ニュートリノの質量自体を測定することができる。宇宙背景ニュートリノの崩壊探索は、ニュートリノ質量決定のみならず、未発見の宇宙背景ニュートリノの発見という点でも非常に重要である。物質起源については、レプトン・セクターの粒子・反粒子非対称性が重要な鍵であるが、ビッグバン宇宙生成の数秒後に自由になった宇宙背景ニュートリノを観測できるようになれば、物質起源の理解を大きく前進させる手段を得る。間接的なニュートリノ質量の決定は、Planck 衛星などによる宇宙背景放射の揺らぎの測定、バリオン音響振動の測定などの宇宙観測結果か

寿命が 2×10^{14} 年以下ならば、宇宙背景ニュートリノの崩壊を発見することができる。検出できた場合、ニュートリノの質量を決定できると同時に、宇宙背景ニュートリノの存在を検証できる。

(2) 実験方法、実験シーケンス等の概念図

本 COBAND 実験では、ニュートリノ崩壊時に発生する遠赤外線 ($E_\gamma \sim 25\text{meV}$) のエネルギーを一光子ごとに 2% の精度で測定するために、Nb と Al を用いた多チャンネル超伝導トンネル接合素子 STJ (Superconducting Tunnel Junction) 光子検出器 [8] と回折格子・反射鏡等の光学系機器を組み合わせたロケット搭載用の超伝導赤外線観測装置を製作し、ニュートリノ崩壊探索ロケット実験を行う。

超伝導赤外線観測装置の概略を図 3 に示す。

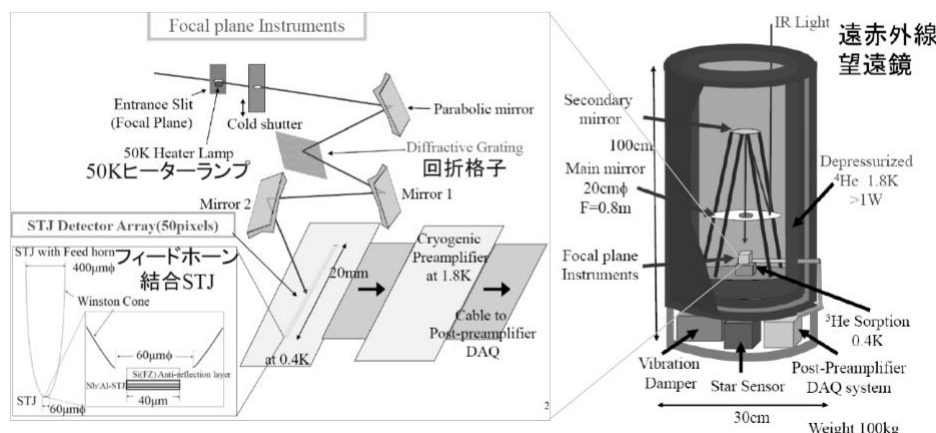


図 3 50 ピクセルの Nb/Al-STJ 検出器と回折格子を含む光学系が 0.4K 冷凍機内に設置されたロケット搭載用遠赤外線望遠鏡

遠赤外線望遠鏡の主鏡直径は 20cm, 焦点距離は 55cm, 視野角は 0.042° , 光学系を含む検出器の検出効率 11%, ロケット実験データ収集時間は 200sec である。最も重いニュートリノの質量が 50meV, 寿命が 10^{14} 年という仮定のもとで、本ロケット実験のシミュレーションをバックグラウンド (黄道放

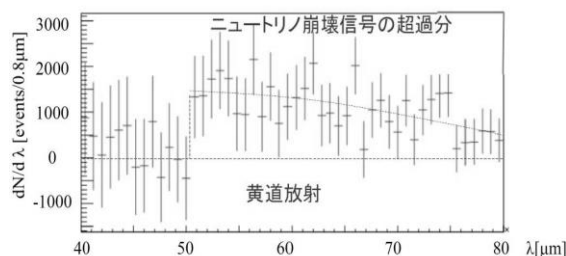


図 4. 寿命 10^{14} 年を仮定した本実験シミュレーションによるニュートリノ崩壊光の波長分布の一例。最尤法によって、黄道放射の寄与を引き去った分布。

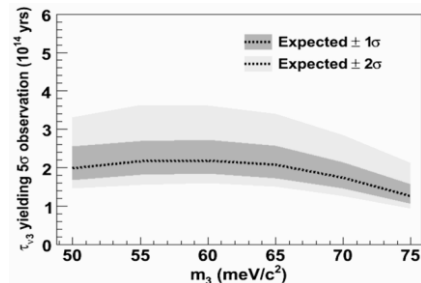


図 5. 本実験によって発見可能なニュートリノ寿命のニュートリノ質量への依存性。

射) + ニュートリノ崩壊信号で行った。シミュレーション・データを解析して、黄道放射の寄与を最尤法によって引き去った波長分布の一例は、図 4 のように、 5σ 以上の有意度でニュートリノ崩壊信号を検出できることを示した。このようなシミュレーション実験を様々なニュートリノ質量と寿命について行った結果、図 5 に示すように、ロケット実験を実施することによって、ニュートリノの寿命が 2×10^{14} 年以下ならば、宇宙背景ニュートリノの崩壊を発見できることがわかった。

以上の議論は統計誤差のみに基づいている。系統誤差は、統計誤差と同程度の 0.1% まで抑える。主要な系統誤差は、以下の 3 つである。

- 50 ピクセル STJ 間の検出効率のばらつき
- 光学系アクセプタンスの波長依存
- バックグラウンド (黄道放射 + 系外銀河の寄与 + 銀河系内ダスト) スペクトルの不定性

検出効率の校正は、実験前に装置に遠赤外線レーザービームを入射して行う。それに加えて実験前と実験中にも、極低温焦点スリット板に設置された 50K 黒体輻射相当の $10\mu\phi$ ステンレス線ヒーターランプによる校正を行い、検出効率のばらつきの不定性を 0.1%程度に抑える。実験中に、図 6 のタイミングで定期的に、シャッターを閉じて雑音データを収集し、50K ランプを点灯して校正データを収集する。信号への雑音混入の不定性は雑音データによって 0.1%以下に抑えられる。50K ランプによる遠赤外線スペクトルは、図 7 に示すように、波長 $70\mu\text{m}$ にピークを持つ。波長 $40\sim 80\mu\text{m}$ の範囲で各 STJ に単一光子が平均 10kHz 程度のレートで入射するように 50K ランプ位置を調整して各 STJ の検出効率を 0.1%の精度で校正する。アクセプタンス波長依存の校正は主鏡に様に遠赤外線光子が入射するように、50K ランプ光源を設置し、実験前に波長依存性の校正を行う。

バックグラウンド・スペクトルの不定性は、30 度の方向スキャンデータを用いることによって、系統誤差を 0.1%程度に抑える。結論から述べると、観測点近くに近傍銀河などがなければ 1° 程度の角度変化は黄道放射模型では無視できるほどスペクトル変化は小さい。観測中の姿勢安定度として保守的に絶対指向精度の 1° を採用すると、視線方向の最大変化量に対する黄道放射の強度変化は 1%程度である。この波長帯での黄道放射のスペクトル測定は滑らかな黒体放射スペクトルを持ち、スペクトル形状

の変化は本実験で要求される 0.1%以下であることが期待される。個別に分解できない暗い系外銀河の重ね合わせは背景放射として観測値に寄与する。この背景放射は姿勢変動により系外銀河が視野内に出入りすることで強度が変動する。図 8 は、「あかり」で測定した背景放射のゆらぎの角度パワースペクトルである。絶対指向精度の 1° では星間ダストの非一様性と銀河による背景放射のゆらぎの寄与が拮抗しており、図 8 に示した両者の合計パワーをゆらぎ振幅に換算すると約 0.003 MJy/sr である[9]。このゆらぎ振幅は黄道放射強度の 0.05%であり、指向方向変動によるスペクトルの変化はさらに小さく無視できることがわかる。これは「あかり」の観測波長 $90\mu\text{m}$ での見積りであり、COBAND の観測波長ではさらに小さい値をとる。以上は絶対指向精度に対応する角度スケールでのゆらぎであるが、観測装置の視野角 (FOV) の角度スケールでのゆらぎの方が大きい。COBAND の FOV (0.042°) に対応する銀河背景放射のゆらぎ振幅は図 8 のパワースペクトルから換算すると約 0.03 MJy/sr であり、黄道放射の 0.5%に相当する。これは Spitzer で観測された波長 $70\mu\text{m}$ での銀河の面密度 (~ 1000 galaxies/sq. deg) から、10 mJy の明るさの銀河が FOV 内に平均的に 2 個入ってくることから推定したゆらぎと同等である。つまり、FOV の角度スケールでのゆらぎは FOV 内に銀河が 1 個出入りすることに相当する量である。各銀河のスペクトルが全く違うとした最悪の場合には、背景放射にはこの程度の

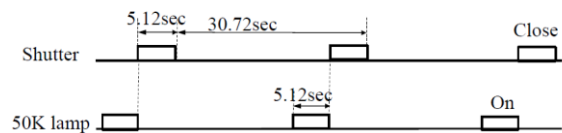


図 6. 本実験飛行中のシャッターを閉めるタイミングと 50K ヒーターランプを点灯するタイミングを示す。全体の約 3 分の 2 の期間が宇宙遠赤外線データ収集時間。

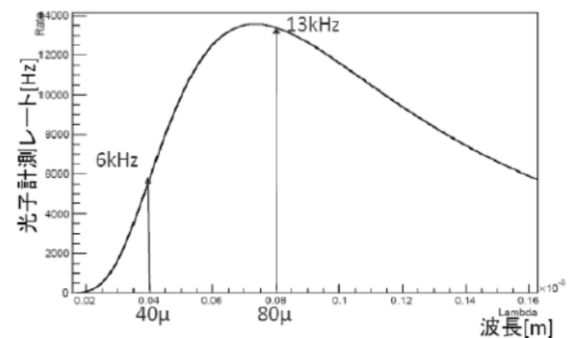


図 7. 50K 黒体輻射ランプによる STJ1 ピクセル当たりの光子数計測レート。

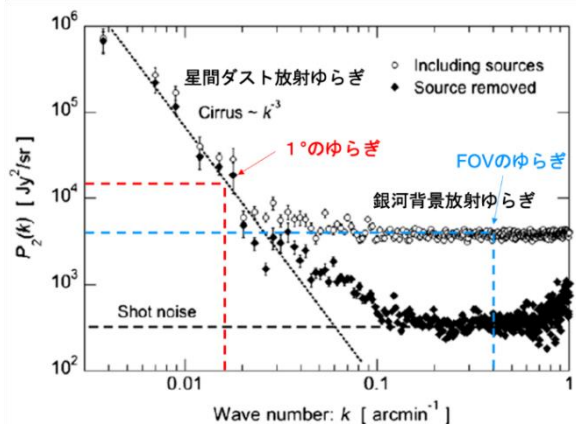


図 8. 「あかり」で測定した背景放射のパワースペクトル

スペクトル変動が生じることになる。COBAND の現案のようなシングルビームでの観測で FOV スケールのゆらぎを低減するには、広い範囲をスキャン観測し観測値を平均化することが有効である。最悪の場合として黄道放射の 1% のスペクトル変動があったときの科学的成果への影響を以下のように評価する。測定領域での傾きが 1% 変動すると考えると、シミュレーション結果より、各測定点の誤差が 0.13% であるので、黄道放射スペクトルはニュートリノ崩壊信号がないとしてフィットすることによって、0.13% 程度の誤差で得られる。そのスペクトルを用いて探索を行うと、信号探索能力はそのバイアスによって半減する。すなわち科学的成果への影響としては寿命下限値が半分になる。すなわち、 2×10^{14} 年の寿命下限期待値が 10^{14} 年になる。

本実験では、1992 年 2 月 2 日午前 1 時に実施された S520-15 実験[10]で測定したのと同じ方向からの宇宙遠赤外線を観測する。すなわち、A 点（銀緯 52° 銀経 151° ）で観測を行う。A 点で 200 秒間観測を行った後に、校正を目的として、A 点から B1 点（銀緯 33° 銀経 140.5° ）へ移動しながら、 30° の方向スキャンデータをとる。移動速度は毎秒 0.6° とする（図 9）。ただし、最初に A 点方向に合わせるまでに 2 分以上の時間を要する場合、その間に観測したデータをスキャンデータとして用い、A 点での観測後に方向を変えない。測定方向に望遠鏡を向ける絶対指向精度は 1° 程度、指向安定性（機体軸直交）は A 点での観測時間中に A 点付近の Lockman hole が視野角内にとどまれるよう

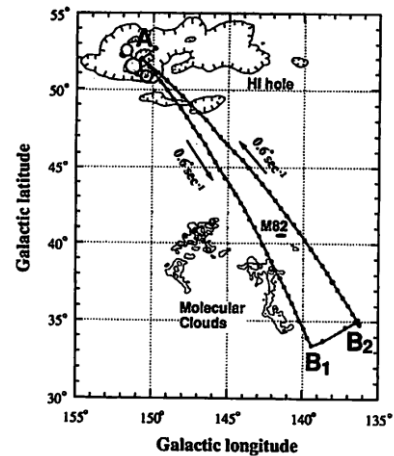


図 9. 測定点と移動経路。この図は S520-15 実験[8]から参照された。

$0.5^\circ/\text{min}$ が要求される。観測方向はスター・トラッカー（先端技術研究所製 CubeStar）を用いて 10 秒角の精度で測定される。発射後、高度 200 km 以上で測定を開始する。S520-15 実験と同じように、飛行中に 30.72 秒ごとに 5.12 秒間シャッターを閉めてペDESTALをとる。また、シャッターを閉める直前に 5.12 秒間 50K ヒーターランプを ON にして校正を行う。スキャンデータ収集時、すなわち A 点から B1 点までの移動中は、この校正を行わない。（図 9 参照）

（3）実験のための搭載機器に関する情報

① STJ 赤外線検出器・SOI 極低温前置増幅器

研究では、我々が 2007 年以来開発を進めてきた超伝導トンネル接合素子 STJ 光子検出器 をロケット実験に用いる。Nb/Al-STJ で遠赤外光一光子の検出を実現し、多チャンネル Nb/Al-STJ と回折格子を組み合わせて、エネルギーを 2% の精度で測定する赤外線分光装置を製作する。50 ピクセルの Nb/Al-STJ と回折格子で 15~30meV のエネルギーの遠赤外光を一光子ごとに 2% の精度で測定する。Nb/Al-STJ 検出器の性能については、COBAND 実験グループのメンバー研究機関である産総研の超伝導デバイス開発施設（略称 CRAVITY）を用いてリーク電流要求値 100pA を満たす

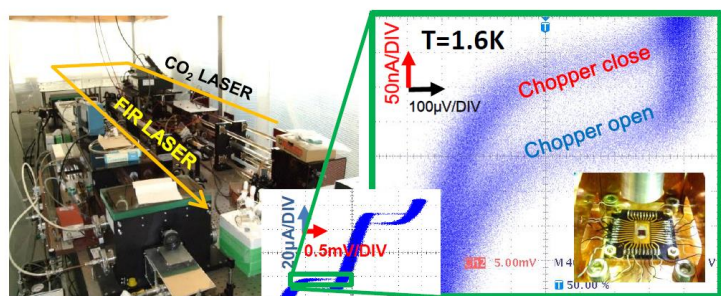


図 10. 遠赤外線レーザー発生装置(左)と Nb/Al-STJ 検出器にその遠赤外線光を入射したときの入射前後での STJ 検出器の電流電圧曲線の変化(右)。Chopper close が入射前, chopper open が入射後の電流電圧曲線を示す。

Nb/Al-STJ 検出器を作製することに成功した[8]。測定する波長領域 $40\text{--}80\mu$ の遠赤外線光子で Nb/Al-STJ 検出器を校正するために、図 10 に示す福井大学遠赤外領域開発研究センターが共同利用の装置として所有している遠赤外分子レーザー装置を用いる。これは遠赤外線連続ビームを出す、我々はこれを STJ 応答信号の応答時間数 μsec のパルスに変換して用いる。このため、高速回転ミラーを用い

て FWHM で $5\mu\text{sec}$ の遠赤外線レーザーパルスを作成することに成功した[11]。また、Nb/Al-STJ 検出器にその遠赤外線連続ビームを入射したときに、図 10 に示すように、STJ 検出器の電流電圧曲線の変化を観測した。この変化から遠赤外線レーザー光を入射したときに、 120nA の STJ 応答電流が流れたことを確認した。

波長 $80\mu\text{m}$ の遠赤外光の信号電荷は 0.025fC (150e) なので、 5σ で一光子検出するために、 $10\mu\text{sec}$ の積分時間に対してノイズを電荷 30e 以下という要求を観測装置に対して課す。この要求を満たすために、極低温 0.4K で動作する SOI (Silicon On Insulator) 技術で作成した MOSFET 回路を用いた低ノイズ前置増幅器の開発を進めてきた。その成果として、我々は極低温 350mK で周波数 0.5MHz 以下の入力に対して 80 倍の増幅率をもつ SOI 前置増幅器の作成に成功し、これを用いて Nb/Al-STJ の

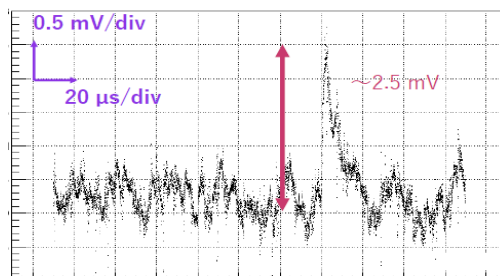


図 11. STJ 検出器の光応答信号を電荷積分型 SOI 増幅器によって増幅した信号。

可視光レーザー光応答信号を増幅した結果、70 倍の増幅信号を観測し、STJ 光応答信号を極低温 SOI 増幅器で増幅できることを確認した[12]。さらに信号ノイズ比を改善するために電荷積分型の極低温 SOI 増幅器を試作し、図 11 に示すように、STJ 信号を 3mV/fC の増幅率で増幅することに成功した。この時の入力換算雑音は 0.1fC (600e) であった。さらに高い増幅率 15mV/fC 、 1.2V/fC の SOI 電荷積分型増幅器を作成して現在試験中であり、 1.2V/fC の増幅器が設計通りに動作すれば、ノイズが電荷 30e 以下という実験要求が満たされる。現在、この電荷積分型増幅器では、 $10\mu\text{sec}$ の積分時間に対しオープンループゲインの周波数帯域が十分でないため、STJ からの電荷を十分収集していないという問題がある。この問題を解決する試作器が 22 年 6 月に完成する予定である。これらの試作器の性能試験結果に基づいて、本実験で要求される低ノイズかつ十分な増幅率を持つように極低温 SOI 電荷積分型前置増幅器を設計する。

② クライオスタット・光学系機器

反射鏡・回折格子・STJ 検出器・SOI 前置増幅器を $0.4\text{K}^3\text{He}$ ソープション型冷凍機に格納した赤外線観測装置を製作する。この赤外線観測装置を JAXA 宇宙赤外線観測実験ロケットに搭

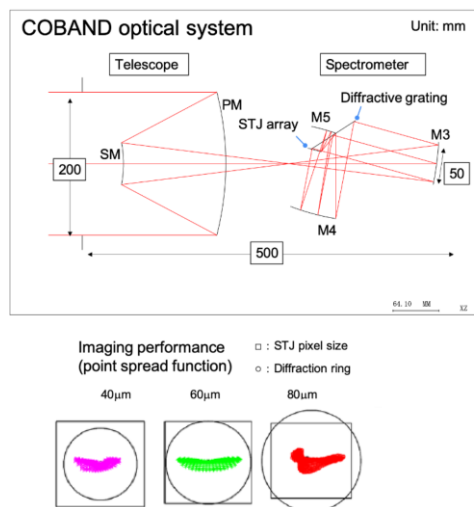


図 13. 光学系の基本設計(上)とシミュレーション結果(下)。スポットダイアグラムでは、紫、緑、赤色の点がシミュレーションによる STJ での波長 $40\mu\text{m}$ 、 $60\mu\text{m}$ 、 $80\mu\text{m}$ の遠赤外線光線の広がりを示す。

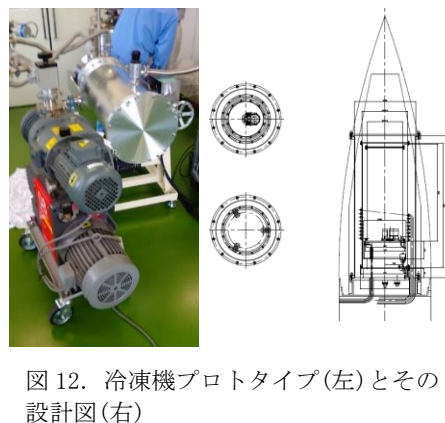


図 12. 冷凍機プロトタイプ(左)とその設計図(右)

載して観測実験を行う。 $0.4\text{K}^3\text{He}$ ソープション型冷凍機は、 3K ^4He 減圧冷凍機内部に設置し、

反射鏡・回折格子の光学系機器および SOI 前置増幅器は 3K に保たれる。STJ 検出器は 0.4K に保たれる。図 12 に示すように、ロケット搭載用 3K ^4He 減圧冷凍機プロトタイプを製作した。この $3\text{K}^4\text{He}$ 減圧冷凍機内部に $0.4\text{K}^3\text{He}$ ソープション型冷凍機、光学系機器、SOI 前置増幅器、STJ 検出器を設置するようにプロトタイプの設計を行った。

図 13 に示すような光学系シミュレーションを用いて、反射鏡・回折格子の光学系機器および STJ 検出器の位置および大きさを最適化する設計を行っている。現在の基本設計では、望遠鏡の焦点距離を 546mm とし、STJ のピクセルサイズ

を回折限界の点像サイズ (Airy disk) である $400\mu\text{m}$ 角とした。光学収差がピクセルサイズより十分小さいことを光線追跡により確認した (図 13 のスポットダイアグラム)。 $400\mu\text{m}$ 角ピクセルをカバーするために、フィードホーン結合 Nb/Al-STJ を用いる。フィードホーン結合 Nb/Al-STJ は、図 14 に示すように、入射口径が $400\mu\text{m}$ ϕ 、出射口径が $60\mu\text{m}$ ϕ のウィンストンコーンの出口に $40\mu\text{m}$ 角の Nb/Al-STJ が位置するものであり、Nb/Al-STJ 表面には反射防止のための Si 膜がつけられている。このウィンストンコーンへの入射角は 8.6 度以下でなければ、遠赤外線光は Nb/Al-STJ に到達しない。回折格子の設計は DiffractMOD 回折格子シミュレーションを用い

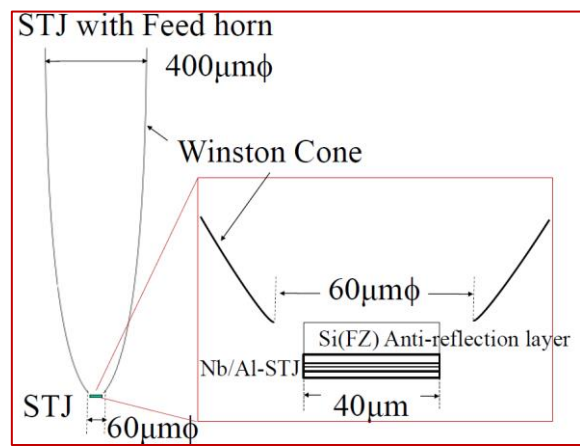


図 14. フィードホーン結合 Nb/Al-STJ. 入射口径が $400\mu\text{m}$ ϕ 、出射口径が $60\mu\text{m}$ ϕ のウィンストンコーンの出口に 40μ 角の Nb/Al-STJ が位置する。

て行い、回折格子試作器を福井大学遠赤外領域開発研究センターの遠赤外分子レーザー装置で性能試

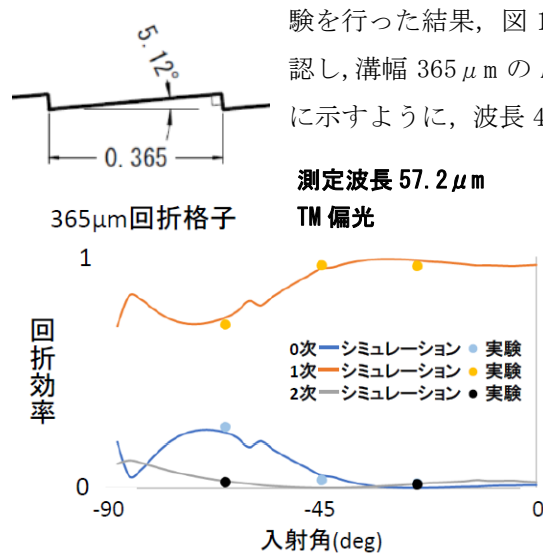


図 15. 回折格子の断面図 (上) と回折格子の回折効率 vs 入射角のシミュレーション結果 (曲線) と測定結果 (・) の比較 (下)。

験を行った結果、図 15 に示すようにシミュレーション予測が正しいことを確認し、溝幅 $365\mu\text{m}$ の Al 製回折格子を用いることに決定した。回折効率は表 1 に示すように、波長 $40\sim 80\mu\text{m}$ の入射赤外線に対して $51\sim 85\%$ となった。CODE V 光学シミュレーションを用いて、集光効率を計算した結果、表 1 に示すように波長 $40\sim 80\mu\text{m}$ の入射赤外線に対する集光効率は $18\sim 37\%$ となった。この集光効率は回折格子の回折効率を含む。さらに、フィードホーン結合 Nb/Al-STJ のウィンストンコーン及び反射防止膜の効率を含むと、集光効率は $4\sim 8\%$ となった。

波長 [μm]	80	70	60	50	40
スポットダイアグラム (100 %) [μm]	256	168	290	198	202
エンサークルドエナジー ($400\mu\text{m}\phi$) [%]	64.7	66.8	66.4	72.8	81.2
入射角度 (8.6 度まで) [%]	53.4	55.9	57.9	59.1	59.4
回折効率 [%]	51.1	62.7	75.6	85.3	76.8
集光効率 [%]	17.7	23.4	29.1	36.7	37.0

表 1. 光学系の集光効率のシミュレーション結果。

③ データ収集と転送

STJ 検出器のデータは 1MHz サンプリングの 7 ビット FADC (最大 127counts) で読み出す。信号パルス幅は荷電積分増幅器の出力で $50\mu\text{sec}$ であり、生データは $1\mu\text{sec}$ の分解能で信号波形情報を保存する。STJ 検出器の 1 ピクセルあたりの黄道放射のレートは 2.4kHz である (検出効率 11% を仮定)。 50 ピクセル・スペクトロメーターを用いるので、STJ 検出器全体の黄道放射のレートは 120kHz である。またデータ収集時間は 340sec である。データサイズは以下のようになる。

<データをコンパクト化しない場合 (生データ) >

毎秒 7 ビット FADC $\times 10^6\text{Hz} \times 50\text{channels} = 350\text{Mbits/sec}$

全体 340 秒間 $0.35 \times 340 = 119\text{Gbits}$

すべての生データを収納したディスク・USB メモリーを実験後に回収する。

<データをコンパクト化した場合>

時間データとして、15 ビット時間 (10ms 単位で最大 650sec) と 10 ビット時間 ($1\mu\text{s}$ 単位で最大 10 msec) を用いる。ペDESTAL と 50K ヒーターランプ校正データと実データのデータ・レートは 3.16Mbps である。すなわち、コンパクト化したデータについて、3.5Mbps でデータ転送を行う必要がある。コンパクト化したデータの全データサイズは $690\text{Mbits}=86\text{MB}$ である。コンパクト化されたデータは、データ収集と並行して、無線データ転送装置 (通信速度 6Mbps) を用いて地上局に転送する。コンパクト化しない生データは無線データ転送が難しいので、搭載メモリーに収納して、ロケット落下後に回収することを希望する。無線データ転送装置については、Addnics 社製の S-band transmitter ($>5\text{Mbps}$) を用いることを計画している。

(3) 打ち上げまでの開発スケジュールと開発課題

本研究では、高分解能で遠赤外線一光子のエネルギーを測定するために、Nb と Al を超伝導素材として用いる多チャンネル STJ 検出器と回折格子を組み合わせた観測装置の開発を行ってきた。主要な開発課題としては、極低温 SOI 電荷積分型前置増幅器の開発があるが、これまでの試作器の性能試験で改良すべき点は明らかになったので、現在試験中の増幅率 1.2V/fC の増幅器試作器と 2022 年 6 月に完成する高周波数帯域で十分オープンループゲインの高い試作器が設計通りに動作すれば、この性能試験結果に基づいて、本実験で要求される低ノイズかつ十分な増幅率を持つように極低温 SOI 電荷積分型前置増幅器を設計し、その試作器を 2023 年度に製作する。この性能試験を 2023 年末に終えて最終設計を行い、2024 年夏に本実験用極低温増幅器を完成する。もう一つの主要開発課題である 0.4K 冷凍機については、2022 年度に既存の $3\text{K}^4\text{He}$ 減圧冷凍機内部に、新たに製作する $0.4\text{K}^3\text{He}$ ソープション型冷凍機を製作して設置する。2023 年夏までに、この性能試験を終えて、最終設計を行い、2023 年度末に本実験用 0.4K 冷凍機を完成する。

フィードホーン結合 Nb/Al-STJ 検出器と回折格子を含む光学系の試作器を 2022 年度に製作する。2022 年度に、遠赤外線レーザーパルスによる Nb/Al-STJ の性能試験を行うとともに、赤外線観測装置の応答校正の方法を確立する。2023 年度に反射鏡・回折格子・フィードホーン結合 Nb/Al-STJ 検出器および 0.4K 冷凍機の試作機のロケット打ち上げ時の振動環境を再現する振動試験を実施し、その結果に基づいて最終設計を完了する。

2024 年春に反射鏡・回折格子・フィードホーン結合 Nb/Al-STJ 検出器を 0.4K 冷凍機に格納した本実験用赤外線観測装置を製作し、2024 年度に振動試験および検出器応答校正を行う。

2024-25 年にこの赤外線観測装置を JAXA 宇宙赤外線背景輻射観測実験ロケットに搭載して観測実験を行う。

(5) 将来計画との関係 (本実験の技術実証的な役割を含む)

我々は論文[3]で、AKARI の観測結果から求めたニュートリノ寿命の下限が 3×10^{12} 年であることを報告すると同時に、左右対称模型が予言している寿命が 1.5×10^{17} 年で質量が 50meV から 140meV のニュートリノの崩壊を検出できる衛星実験を提案した。衛星実験で 60 日間観測することによって宇宙背景ニュートリノの崩壊からの光子を有意度 5σ で検出できる。

本ロケット実験によって現在の寿命上限を 100 倍改善できる。その後、ピクセル数を 50×8 にすることによって、8 列の位置情報を得て、感度を 3 倍程度上げるロケット実験を行う。さらに 3 桁感度をあげる衛星実験あるいは惑星間宇宙望遠鏡実験に向けた大きなステップを刻む。ロケット実験用 Nb/Al-STJ 開発・製作と並行して、将来は前景放射の寄与が少ない太陽-地球ラグランジュ点や惑星間空間に滞在することで極めて高い精度の観測を行う探査機計画 (惑星間宇宙望遠鏡) に向けて、エネルギーギャップの極めて小さいハフニウムを用いた Hf-STJ についても将来実験用の光学系を含めた観測装置の開発研究を行っており、可視光レーザーおよび X 線に対する応答信号を検出することに成功し

ている。開発研究を行った超伝導赤外線検出器・冷凍機・光学系機器の技術をさらに発展させて、将来実験で使用する。

人工衛星あるいは惑星間宇宙望遠鏡搭載実験は 2030 年以降に実施することを目指す。そのために検出器開発・実験設計を 2030 年までに完成する。

(6) おわりに

本研究 COBAND 実験（ホームページ <http://hep.px.tsukuba.ac.jp/coband/>）は筑波大学宇宙史研究センターの重要プロジェクトとして強力な支援を受けている。その支援で、韓国成均館大の共同研究者のリサーチユニットが学内に招致され、また福井大の研究分担者が筑波大併任教授として共同研究に参加し、実施の中心となる筑波大学の特命教授 1 名、准教授 1 名、助教 1 名と共に、本研究を推進している。COBAND 実験は、国内機関では筑波大学、JAXA/ISAS、関西学院大学、福井大学、理化学研究所、東京大学、近畿大学、KEK、産総研、岡山大学、静岡大学、海外機関では韓国成均館大学、韓国 IBS CUP、米国フェルミ国立加速器研究所の 14 機関から総勢 39 名が参加して形成した宇宙背景ニュートリノ崩壊探索研究コンソーシアムの基に実験準備を進めている。

<参考文献>

- (1) Particle Data Group, “Review of Particle Physics” Chin. Phys. C **40**, 100001(2016).
- (2) P.A.R. Ade *et al.* (Planck Collab.) Astron. Astrophys. 571 A16 (2014).
- (3) S.H. Kim, K.Takemasa, Y.Takeuchi, and S.Matsuura, J. Phys. Soc. Jpn. **81** (2012) 024101.
- (4) M.A.B. Beg, W.J. Marciano, and M. Ruderman, Phys. Rev. D**17** (1978) 1395-1401.
- (5) A. Aboubrahim, T. Ibrahim, and P. Nath, Phys. Rev. D**88** (2013) 013019.
- (6) M.G.Hauser *et al.*, ApJ, **508** (1998) 25, D.P. Finkbeiner *et al.* ApJ, **544** (2000) 81.
- (7) S. Matsuura *et al.*, ApJ, **737** (2011) 2.
- (8) S.H. Kim *et al.*, JPS Conf. Proc.**1** (2014) 013127, Y. Takeuchi *et al.*, 2015 IEEE International (2015) 551-555.
- (9) 松浦周二 天文月報 2012 年 11 月 686.
- (10) H. Matsuhara *et al.*, PASJ, **46** (1994) 665.
- (11) C. Asano *et al.*, Mem. Grad. Eng. Univ. Fukui, (in Japanese) Vol. **66** (October 2017)2017) 1.
- (12) S.H. Kim *et al.*, Proceedings of Ineternational Conference on Technology and Instrumentation in Particle Physics (TIPP2017) SPPHYS **213** (2018) 242-248.